
焼き鳥とこの町

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼き鳥とこの町

【Nコード】

N0923G

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

一人の男が一人の孝治と出会い成長して行く…

「ラーメン上がり！」俺は大声を出した。俺は東条武今年26歳になる。大阪生まれ育ちこの大阪を出たこともない。彼女もない寂しい一人暮らしだ。今はラーメン屋でバイトとして働いている。今は真面目に働いているわけだが、この仕事もいつまで続くかわからない。そんなダメな大人である。1年前に3年続いたバイトをクビになり半年前にやっとこのラーメン屋にバイトで雇ってもらえたのだ。特にラーメン屋がやりたかったわけではないが面接を受けまくり受かったのこの店だったと言うだけだ。

「いらつしゃい！！」なぜか今日は客が多い、武は真面目に声を出して働いている。でも心の中では

「こんな時間にラーメン食うと太りますよ」と思いながら時計を見ると夜の11時をまわっていた。仕事が終わって店を出たのは夜中の2時を過ぎていた。家に帰る途中後ろから

「君何してるの？」と声をかけられた。振り返って見ると警察官が立っていた。警察官は

「こんな時間にいったいどうしたんだい？」と言ってきた。俺は

「仕事帰りです。」とサラッと答え免許証を出した。警察官は

「すいません！今交通事故が多いもので」と訳わからん言い訳を言い去っていった。俺はまたか！と思いつつ帰り道

「いったい何歳に見えるんねん。今年何回目やねん！俺は中学生か？」とブツブツ言いながら家に帰った。

「ただいま！」とドアを開け

「誰もいないけど」と最大にスベルボケをした後で部屋に座った。テレビをつけながらインスタントラーメンを食べラーメンづけに少しうんざりしながら食べ終わってそのまま寝てしまった。朝になり携帯の目覚ましアラームで目が覚めすばやく着替えて家を出た。店の開店準備をしていると店の前の道に一人の男が煙草を吸っていた。

俺は

「派手な服やな！めっちゃ緑やん頭も緑やん」とつぶやき店の奥に戻った。それが孝治との初めての出会いだった。昼の忙しい時間がようやく過ぎ一息ついていると一人の客が店に入ってきた。俺が客の方を見ると孝治だった。俺はおもわず

「緑マンや！」と言ってしまった。孝治は

「誰が緑マンやねん」と軽くツツコミ孝治は激辛塩ラーメンを注文をした。俺は

「珍しいもん食べますね。」と言ってみた。孝治は

「おお！あつさりした辛いラーメンが得意分野やねん！」と意味不明な事を言ってきた。明るい性格の孝治はすぐ俺と仲良くなりすぐに店の常連客になった！何日かたったある日仕事も終わり歩いていると久々に携帯がなった。携帯にでると、孝治だった。孝治はハイテンションの声で

「飲み行こうや」と言ってきた。断る理由もないし俺は

「ええよじゃあ駅前の居酒屋に来てや！」と言って電話を切った。

合流した俺らは店に入って焼き鳥をほうばりながら、孝治はいきなり驚いた声で

「武ちゃんてタメなんや」と言ってきた。俺も

「えゝそうなんやゝ！」と驚きつつ内心

「なんでちゃんづけ？俺はそんなにガキに見えるのかな？」というんな疑問が浮かび上がったが孝治は面白い奴で孝治は今カレール屋でバイトしているらしい。頭の色はポリシーらしい。孝治も一人暮らしで大阪育ちで似ている所が多い俺らはみように気が合い飲みあかし二人で酔っ払い暴れたせいで店を追い出された。孝治は

「またなゝバイバーイ！」と言に残し俺らは別れた。次の日俺は二日酔い気味の体で仕事をしていると店長に呼ばれ休憩室に座らされた。俺は、

「クビかよ！！」と思いながら店長の話を聞いていた。店長が静かに話始めた。

「武！店やつてみんか？」いきなりだった。俺はビツクリして何も言えなかった。店長は冷静に

「あんな。わしの弟がな株でめっちゃもうけてな。弟は武も知ってるやろ？」俺はあのノリのいいおっちゃんか！と思いだしつつ俺は店長に聞きかえした

「何で俺なんすか？」店長は軽く

「おお俺も聞いてみたんよ。そしたらな、武はノリもええし真面目やから気にいったと言ってたで！」俺は複雑な気持ちで

「有難うございます。」と店長に頭を下げた。店長は笑顔で

「そいでな武よ！弟がな真剣に店やるんなら力貸すと言ってるんや。でも武の気持ちはどないや？」俺は店長に

「ちよつと考えさしてくれませんか？」と一言残し仕事にもどった。その夜部屋で一人考えていた。

「店かあゝ。免許とかいるんやろな。俺ラーメンしか作られへんぞどないしようかな？でもチャンスやしな。」夜通し俺は独り言を言っていた…

答えが出ないま

ま一週間が経ったある日店長の弟さんが店にやってきた。弟さんは「おお！武君元気してるか？店やる気なったか？」といきなり聞いてきた。俺は

「調理師免許もないですし…自信もないですからお断りします。」と俺は答えた。いきなり弟さんはキレた口調で

「そんな免許俺がとらしたる！俺はなお前が心配やねん！人生ドンと生きんかい！！チャンスやろ、やってみんかい男やろ！根性ださんかい」俺はこんなに言ってくるオッサンは初めてや。と思いつつ勢いに負け

「やります！」と俺は答えた。弟さんは

「おっしや！決まりや。詳しい話は武君が決めたらええ！なんの店やるとかはまた報告してくれ。」俺は

「わかりました。ありがとうございます！」と答え仕事に戻った。仕事が終わりに居酒屋で一人でビールを飲みながらいきなりの人生の

転機に驚き不安でいっぱいだった。俺は一人で店をやるなんて無理やゝ！とまたネガティブになり孝治に相談することにした。俺の携帯で連絡出来る友達が孝治しかいなかったからだ…孝治はすぐに居酒屋に飛んで来た。孝治はいつものハイテンションで店に入ってきて俺を見つめ

「武ちゃん！ヤッホー偶然やな。」と言ってきた。

「俺が呼んだんやろ」と軽くツツコミ今日の出来事を孝治に話初めた。孝治は

「ええやん！やってみいや。いい話やん。武ちゃんハイパーチャンスやん。」孝治は力強い一言で元気づけてくれた。俺はこいつと店やったらおもしろいかもと思い

「孝治も一緒に店やろうや！」と言ってみた。孝治は笑いながら「そやな！そうできたら最高やけど…」孝治はいつになく弱気だった。俺は

「とりやえずおっちゃん紹介する段取りできたら連絡するから！」と言い孝治とビールを乾杯しまた飲みあかした。そして3日後孝治をおっちゃんを紹介する日になった。俺らは喫茶店で会う事になり孝治と先に喫茶店に着いた俺らはコーヒーを飲みながらおっちゃんを待っていた。30分後おっちゃんがやってきた。おっちゃんは「おおゝ武君！おまたせ。」と言ひ席についた。おっちゃんはいきなり

「この子やな？一緒に店やりたい子は？すごい緑やなおもしろいやん。」孝治はいつもの明るいノリでおっちゃんと会って5分で打ち解けた。俺はさすが孝治すごい才能やなと感心した。おっちゃんは「ええやろ！いい子や二人で店やるのは大賛成やで。頑張りや」といい残しまだ仕事が残ってるからと足早に店を出ていった。こうして俺と孝治は一緒に店をやることになり問題は山積みだが少し人生に光がさした気がした。その日の夜いつもの居酒屋で俺らは上機嫌で飲みながら将来に乾杯した次の日俺の部屋でチーズカマボコを食べながら俺らはなんの店をやるか考えていた。なかなか決まらない

もので部屋は重い空気に包まれていた。孝治はいきなり

「らちあかな！いつもの居酒屋行こうや？あそこの焼きとり食いたくなつたわあゝ」俺も

「せやな行こうか！」俺らは部屋を出た。店に行くのと店の店長が「また来たんか？最近よう来るな」と呆れ顔でまだ注文してないのに焼き鳥と生ビールが出てきて俺らはビックリしながらもちよつと嬉しかった。その時にこういう居酒屋をしたいと思った。孝治も同じ事を考えていたらしく、自然に店の種類は居酒屋に決まった。それから俺らは焼き鳥をほうばりながら調理師免許をとるために勉強せなと俺らはちよつとブルーな気持ちになった。次の日俺らはおっちゃんに居酒屋の店をやると伝えた。おっちゃんは学校も行かしたると言ってくれたが俺らは甘えず試験を受ける事にした。俺も孝治も人生で初めてな位やる気を出していた。俺らは実務経験を積むためバイトを辞め色んな店を面接を受けたが惨敗した！落ち込みがでかい俺らはふらふら歩いているいつもの居酒屋にいきついた。店長が

「なに暗い顔しとんねん。腐つてまうぞ。」俺らはいきさつを話始めた。店長が

「おつしゃ！二人とも雇つたる」俺らはビックリしたが嬉しかった。俺らは声をそろえて

「お願いします！」と頭を下げた。俺らは色んな人に助けられてるな。と初めて思った。この町で育つて良かったと、俺は思った。

その日から俺らは店長のもとで修行を開始した。俺らは必死に働いた。時にはどつかれたり、様々で腹がたつ事も多かったが、仕事終わりの店長の焼き鳥とビールで俺らはなんとか頑張る事が出来た。半年位たつと少しづつだったが料理も覚えていった。勉強の方は二人で頑張つてたが前には進まない！二人とも勉強が大嫌いだった。中身の濃い3年が過ぎるころにやっと俺は調理師免許をとる事が出来たがその年も孝治は落ちてしまった。

「俺受かるせんわあゝ！焼き鳥の問題やったら満点やのに！つくね

さんに失礼やつちゅうねん！なあ？」俺は孝治らしいなと思いが
ら孝治の悔しさが十分に伝わった。

「落ち込んでてもしやあないしおっしや！焼き鳥焼くわあゝ！」孝
治は焼き鳥を焼き始めた俺らの師匠もおっしや

「わしも焼くで！」と焼き鳥を焼き始めた。俺は師匠なりの励まし
に嬉しくなり

「俺も焼くぞ！」と負けずに俺も焼き始めた。3人が焼き鳥続け気
づいたら山盛りの焼き鳥が出来た！師匠が

「おい！この焼き鳥どないすんねん。3人じゃ食べへんやろ。」俺
らは爆笑した。

「武ちゃん！おっちゃんに食べてもらおうや？」孝治がおっちゃん
に電話しておっちゃんとラーメン屋の店長が来てくれた。おっちゃん
は

「旨い最高や！」と焼き鳥を食べてくれた。

その日は朝まで焼き鳥パーティーは続いた。

次の日俺らは孝治の部屋で昨日のおっちゃんの一言が嬉しくてたま
らくて俺らは早く店を開いておっちゃんや師匠に恩返しする事を誓
いあい、孝治は勉強を必死にやっていた。いつの間にか少し前ま
での俺らとは変わっていった。翌年、孝治も無事に試験を受かり去
年のように焼き鳥パーティーで祝った！最高の1日となり孝治も嬉
しそうにつくね食べていた。その時静かに師匠が口をひらいて喋り
始めた。

「武、孝治お前らがこの店に来てからもうすぐ5年になるな。よう
頑張ったな。来たばかりの頃は全然料理も出来へんしすぐお前ら
は諦めてたけど…よう成長したな。ええ店期待しとんぞ！ええか二
人とも料理は真心やこの町みたいにあつたかい料理作れよ。これか
らも応援してるからな。卒業や！」師匠は初めて泣いてくれた。

「有難うございました。」俺らはそれ以上にも言えなかった。最
後に明るく3人で乾杯をして師匠の店を卒業した。次の日早速おっ
ちゃんに報告しに行き。色々店舗を探し歩いた。そして広くはない

がいい物件を見つけた。孝治は

「いい物件やん！なんか落ち着くやん！武ちゃんはどう思う？」
不思議と俺も落ち着く雰囲気を感じた修行したあの居酒屋に似た雰囲気を感じたからだと思う。おっちゃんに相談しに行くとおっちゃん

「ようやくスタートラインに立ったな！店の金は心配するな用意したる！」と力強く言ってくれた。俺らは

「有難うございます。でも少しずつ返します。」と言うと、おっちゃん

「わかった期待しとくわ！」と言ってくれた。俺らは感謝の気持ちでいっぱいになりながらおっちゃんに深く頭を下げお礼を言った。その日から俺らは開店準備に大忙しになった。まずメニュー決めにとりかかった。

「武ちゃん！俺な、中華風熱々海老グラタンをメニューに加えたいねんけど？」俺は

「どんなやねん？」と笑い飛ばした。とりあえず俺らの得意な焼き鳥をメインに鳥料理を充実させた。店の改装も順調に進みいよいよ開店の準備が整った。孝治が突然

「武ちゃん店の名前どないするよ？」俺もすっかり忘れていた。俺は「そやな！難しいな。」そんな事を言っていると孝治が「師匠がいつも俺らに根性足らんと言うとったやん！だから忘れへんために店の名前根性にしよか？」俺は

「おもしろいやん。ええよ！」案外すんなり名前は決まった。そして俺らの店

「根性」の開店初日がやって来た。朝から仕込みをしながら俺らは客が来るかドキドキしていた。いちようビラを配るなど宣伝はしたてはいたがそれでも不安だった。そして夕方店をあけた。

ちらほら客も入って来た。

俺らはホッとしつつ元気よく心を込めて料理を作った。孝治のトークも絶好調で滑り出しは順調だった。俺らはがむしゃらに働いた。

昔とは違つやりがいと充実感を覚えていた。店を開店してから半年位経つと大繁盛とはいかないが常連さんもふえてきた。店のはしつこで最近よく来る2人組が昔の俺らとそっくりで笑えた！孝治が「最近よう来てくれますね。」と言うと

「この焼き鳥旨いんすよ。鳥丸ごと食いたい位ですわあ」その一言が嬉しかった。ようやく店にもなれ初めてきた頃、俺の携帯が鳴った。相手は昔のバイトラーマン屋の店長だった。

「大変や！弟が事故におうたんや！孝治と武には知らせた方がええやろと思つてな。」俺は一瞬言葉を失つたが

「事故つて状況はどないなんですか？」店長は言葉を詰まらせながら「意識不明の重体や」俺は

「とりあえず病院を教えて下さい！」俺は真つ白になりながら電話を切つた。孝治は話を聞くと

「何でや！嘘やろ？」かなり動揺していた。俺らはすぐに病院に飛んでいった。病院に着くとそこにはもうあの明るいおっちゃんの姿は無く…変わり果てたおっちゃんがそこにはいた。俺らは一瞬状況が飲み込む事が出来ずその場所を動けずにいた。俺はゆっくりおっちゃんに近づき

「おっちゃん！起きて下さい！まだ俺恩返し出来てません。おっちゃんに店来てもらう事も出来ずに…」俺はこれ以上言葉が出てこなかった。店長は俺の肩をポンとたたき一言

「ありがとうな！」俺らはよけい涙が止まらなかった。お葬式の日最後のお別れの時まで俺達はおっちゃんはおもろい人だから…

「ドッキリ大成功！ビックリしたか？」と登場するような気がしていた。おっちゃんが亡くなって俺らは店をやらなくなった。毎日抜け殻のようにすごした。俺らはある日ぶらぶら町を歩いていると、またこの町の暖かさ触れる事になった。常連のお客さんには

「焼き鳥また焼いてや！待ってるで！」師匠には

「元気ださんかい！待っている人がいるやろ」と言われるしで俺らはこの町に救われた。その夜、

「武ちゃん！俺店再開するわぁー！こんままやったらおっちゃんに殴られるで」俺も

「そやな！元気だなな！」俺らはその足でおっちゃんのお墓に行き2人で手を合わせ

「おっちゃんこれから見守って下さい。」と報告し、久しぶりに店を開けた。いろんな人が来てくれた。店の中は暖かさでいっぱいだった。俺らは感謝を込めて店を閉めた後、常連さんや店長、師匠を呼んで焼き鳥パーティーをひらいた。そのパーティーは朝まで続いた。俺は

「おっちゃん見ててや！俺は頑張るから」と心に誓いつつまでもこの町で焼き鳥を焼きたいと思った…（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0923g/>

焼き鳥とこの町

2010年10月8日15時10分発行